



東京の都市景観についての一考察

陳 穎恩 (香港大学日本文化研究学系・現代日本経済史専攻院生) CHAN Wing Yan

都市の規模と形態の多くは長期にわたって育成、発展し、歴史的、文化的、経済的な意味が含まれている。

東京は徳川幕府が創立された1603年以降、政治の中心として成長してきた。明治維新(1868年)によって天皇が東京に移り、日本の首都となつてから、政治、商業、金融、教育とマスメディアなどの諸機能を一心に集めた核心的な役割を担う大都市に徐々に変身してきた。東京は1923年の関東大震災、第二次世界大戦中1945年夏の空襲によって破滅的な打撃を受けたが、現在それらの被害を全く感じさせない。

観光客にとって東京のもっとも魅力的なところは、その都市としての多様性にある。アメリカ占領軍の歴史学者セオドア・コーエンはその著作“the Third Turn: MacArthur, the Americans and the rebirth of Japan”(大前正臣訳『日本占領革命:GHQからの証言』上・下、TBSブリタニカ、1983年)で、日本は歴史上三回、その方向性を明らかに変えた大きな転機を経験してきたと述べている。彼の意見は以下のよう整理されるだろう。

初めの転機は7~8世紀に起こり、中国の文化、宗教、文学と文字システムが日本に導入された。第二回目は幕末・明治時代であり、国家安全に対する西洋の脅威に対応するために、政治、軍事、経済と法律などの諸分野において欧米的な制度にあわせて改革が行われた。明治維新の成果は、第一次世界大戦(1914~1918)の日本の勝利によって、世界に示された。第三回目は日本が第二次世界大戦(1937~1945)に負けた時であった。1945~1952年、日本はアメリカが指導する連合国最高司令部の軍事占拠のもとに置かれていた。このGHQ占拠時代に、非軍事化、非独占化、民主化を目指す徹底的な戦後改革が推進されていた。

これらの驚くべき転機の結果は、想像以上である。今日の日本の歴史は第二次大戦後のそれより人を驚かせている。人々は東京の都市景観から、日本史上のこれら重要な転機を見て取れるだろう。歴史的にみれば、東京の都市景観は西洋文化への積極的同化を見せていながら、古くからの伝統を守っている。日本の神社と寺院は世界的にも有名な宗教的大建造物であり、日本の習慣と宗教を反映している。日

本式と西洋式の両方の庭園を持ち合わせた上野公園、新宿御苑、日比谷公園、北の丸公園など、緑地の存在も都市景観のもう一つの特色である。

東京の都市景観の歴史的变化を考察するにあたり、産業地区の発達を無視できない。明治、大正時代から始まった産業化は産業地区を誕生させた。現代史において産業地区は、日本経済の奇跡を育て、商品製造から商品の研究開発へと日本経済が変化していく姿を見守ってきた。

21世紀初めの今日において、全ての大都市はその歴史的な転換期にあるように見える。東京は世界の最も重要な情報都市のひとつとして発展した。発達した鉄道と高速道路網が四方に走り、整備されたインフラと様々な建物が多種多様な都市景観を生み出している。東京の心臓部はビジネスの中心地千代田区と、行政機関や商業ビルが密集する新宿であり、大型ショッピングモールや各種文化遺産、歴史建築、緑地は東京の至る所で密集している。東京の景観は、東京や品川駅周辺のように発展が鈍化した古い地域は補修、再活性化され、お台場地区のような再開発プロジェクトによって活性化している。東京の成功は、林立する高層ビルのような、新しく建設されたハードウェアやインフラによるだけではなく、歴史、文化、多様性などソフトウェアにも支えられている。

筆者は、神奈川大学21世紀COEプログラムの招聘により、訪問研究員として東京都市景観と近代歴史文化というテーマを携え、約二週間日本で調査を行った。今回の訪問により、私は日本経済を歴史的、文化的背景から理解を深めることができた。この素晴らしい機会を提供して下さった神奈川大学21世紀COEプログラムに対して心より感謝の意を表したい。(陳穎恩氏は2005年12月5日~12月18日訪問研究員として来日。)



東京タワーからみた新宿ビル群



増上寺と東京タワー